

「個を磨き，他と協働して高めあう子どもの育成」

～地域と関わり合いながら，自己解決能力を育てる太田の教育～

学校名 厚岸町立太田小学校

校長名 富田 義宏

担当者 小手森良貴 水上翔

1 趣旨・本校の ESD の特徴

本校は、「個を磨き，他と協働して高めあう子ども育成」を学校理念として，ESD を課題解決の活動と捉え，SDGs の理念も視野に入れながら，ESD に関する実践を通して主体的に社会に参画し，協働して課題解決に取り組むことを目標としている。

具体的には，生活科や総合的な学習の時間をはじめ各教科，領域等の授業のみならず全ての教育活動を通して，環境や国際理解，持続可能な生産と消費，減災と防災などを通して，①地域に関わる活動 ②異文化理解に関わる活動 ③環境に関わる活動等を行っている。

2 活動・全体計画

生活科・総合的な学習の時間の全体計画の見直し・改善を行い，児童の発達段階に応じた活動を行う。

また，小中 9 年間を見通した活動となるよう，校区の中学校と連携して今年度作成した生活科・総合的な学習の時間を核とした「小中 9 年間の学びの地図」に基づく教育活動の充実を図るとともに，地域の保育所とのスタートカリキュラム等での連携も深めていく。

さらに，地域とともにある学校づくりを目指したコミュニティ・スクールの活動の充実を通して，地域の学習素材や人材の整理を行うとともに，行政機関等外部関係機関との積極的な連携・活用を促進する。

3 活動事例

① 地域に関わる活動

- ・生活科「牛となかよし大作戦！」（次頁以降に実践紹介）
- ・総合的な学習の時間「私たちの太田～屯田兵・開拓について～」 等

② 異文化理解に関わる活動

- ・JICA（国際協力機構）研修員の来校，交流活動…令和 2・3 年度は中止

③ 環境に関わる活動

- ・児童会主体の「厚岸町 EMS（環境マネジメントシステム）」の取組
- ・学校林を活用した「森林教室」…令和 3 年度はアカエゾマツ苗木保全活動

4 成果と課題

「【実践紹介】6 活動の成果」で述べたとおりであるが，令和 3 年度の取組を通じて一番の成果として挙げられるのは，保護者や地域から「何か一緒にできないか」と学校に相談に来ていただける関係が構築され，生活科に限らず様々な教育活動への関心や協力が今まで以上に厚くなったことがあげられる。この良好な関係性を存分に活用した実践を全校体制で重ね，広く発信することで太田地域の発展と安定に寄与していきたい。

【実践紹介】 生活科 「牛となかよし大作戦！」

～「地域で育む」生活科の実践～地域一体で子どもの成長を支える授業の創造～

1 解決すべき課題

本学級の児童は1年生6名、2年生2名、計8名である。そのうち7名の家庭が酪農を生業としているが、7名とも牛舎での手伝いなど動物との触れ合いや飼育の経験が無く、仕事についての認識も薄い。また、児童数名が見つけたバツタを教室で飼育したことがあったが長続きしなかったという実態もある。このことから、生き物との触れ合いを通して、命の尊さや飼育の工夫の大切さに気付くことが課題として考えられる。

2 本単元の目標

- 仔牛の成長の様子に関心をもち、飼育する活動を通して、様々な世話の仕方があることや生命をもっていること・成長していることに気づき、仔牛や酪農への親しみをもち生き物を大切にすることができるようにする。
- 活動を通して自分自身の成長を実感し表現することができる。

3 授業展開の重点

- ①思いや願いの実現に向け、仔牛と繰り返し関わる学習活動を構成する
- ②学習内容と他教科・日常生活との関連を図る
- ③地域が一体となって子どもたちの成長を考え、支える体制を整える
- ④子どもの成長の見通しを可視化した「想定表」を作成、活用する

自分自身への気付き	
<ul style="list-style-type: none"> ◎牛と一緒に成長できたよ。◎自分一人でできるようになったよ。 ◎将来働きたくなった。◎これからはお手伝いを続けたいな。 ◎自分たちこそいろんな人にお世話になったな。◎農物は勝手にたたくけど今は全然平気。 ◎お世話を続けることで命を守ることができたんだ。 	気付きの質の高まり
<ul style="list-style-type: none"> ◎仔牛によっても、お世話の仕方を覚えることが大切なんだね。 ◎きつと、こうやって書ってるんだらうなあ。牛の気持ちも分かってきた。 ◎仔牛と成牛ではお世話の仕方が変わるんだね。 ◎人間と同じように、おなかの中で大きく育つんだね。 ◎観察さんと石澤さん、同じ思いをもっているね。 ◎子どもを産んでからやっどミルクが出るんだね。お母さんと同じだ。 ◎顔は仔牛をきれいになめてあげるといいんだね。 ◎僕も大切だけど、丁寧なお世話をすることが元気になるコツなんだ。 ◎あれ、体調が良くなさそうだね。いつもと違うな。 ◎どの仔牛、エサやミルクの量が違ってきただよ。 ◎お世話のコツがわかってきたね。余った時間でこれでもできそうだ。 ◎あっ！お父さんが書っていた通りだ。うまいっ！ 	
<ul style="list-style-type: none"> ◎お世話って大変だね。 ◎ミルクを飲むのが遅いな。 ◎でわると言わぬか、心も動いている。 ◎牛が退けていくよ。緊張しているのかな。 ◎かわいいな。でも、くさいなあ。 	
無自覚な気付き	

④ 想定表

身に付けさせたい資質・能力を児童一人一人が確実に身に付けることができるよう、①～③を関連付けながら指導・評価する。また、日々更新される子どもたちの願いや思いに柔軟に寄り添うことができるよう、教員をはじめ協力していただく多くの地域の方々との打ち合わせの際には、子どもたちの現在の気付きの状況や今後の成長過程の見通しについて「④想定表」を活用しながら説明し、地域と学校が一体となって学習活動を創造できるようにする。

4 活動内容

保護者が経営する石澤牧場への探検の際に、「この仔牛たちをみんな育ててみませんか？」という提案を受けたことから学習活動が始まった。子供たちは仔牛専用の牛舎一棟を借り、7月～9月の期間、週1回の頻度で仔牛のお世話に取り組んだ。世話の仕方や安全対策については、本実践に協力して下さった石澤牧場をはじめ、釧路太田農業協同組合（以下「農協」）のサポートを得ることができた。また、夏休み期間は家庭学習の1つとして自分の家の牛舎に行き、両親や祖父母からお世話の技術を教えてもらい、お世話の技術向上はもちろん、酪農業や仔牛のお世話に対する関心を高めていくことができた。



お手伝い場面

7月16日(金)

お世話日記

わたしは、石澤牧場へ仔牛のお世話に行きました。二回目だと子牛にもなれてきました。

まずはじめに、お世話を始める前に一年生にうんこそうじのコツを教えてくださいました。そしてその後子牛のお世話をしました。今回は、お世話をこまめにやりました。すつとやっている内にコツをつかんできました。こいしは、お世話をこまめにしたいんで、すつとしか、たけたとん、たん楽しくなりました。

夏休みは、おじいちゃんとおばあちゃんや、お父さんにほかのしごとを覚えてもらいたいです。夏休みが楽しみです。

牛のお世話日記

子どもたちは、「体験（お世話）」→「表現・交流（絵日記）」

の繰り返しの中で、「こんなことを自分たちでできるようになりたい」「きっと仔牛は驚いてい

るから、そっと待ってしよう」「自分も、石澤さんみたいに寝わらをたくさん運びたい」といった思いや願いを抱き、友達や地域の大人と協働的に学習活動を進める過程で、仔牛のお世話に関わる知識や技能はもちろん、自分と仔牛、お世話に関する気付きの質的な向上も見られた。

単元の最後は、食育の一環として地域住民が講師となり、地域のブランド牛乳「極みるく65」を使った手作りバターや生乳でチーズを作る体験が実現し、地域の基幹産業である酪農への関心を高める上で、一層充実した学習活動となった。

5 取組の過程

夏休み明けの最初のお世話に行った時、子供たちはこれまでお世話をしてきた仔牛のお尻の毛が抜け落ちてしまっていることに気付いた。いつもお世話を手伝ってくれている農協職員から事前に「将来おいしい牛乳を出すか出さないかを決めるのは、哺育期間のお世話が大切」ということを学んでいた子どもたちは、この仔牛について瞬時に「なんとかしたい」という思いを抱いたのだが、どうすればよいかわからず困惑していた。するとある子が「うちの牛舎に、獣医さんが来て病気の牛を治してくれたことがある！」とみんなに話した。そこから学校と農協、獣医師で子どもたちの思い・願いの実現に向けた連携を図り、獣医師が子どもたちと一緒にお世話することが実現した。子どもたちは「きっと注射や薬で治るはず」と予想していたが、獣医師は「規則正しい生活をすれば治る」と教えてくれた。子どもたちは拍子抜けした様子だったが「牛も人間と同じ！」ということに気付く。体調不良の仔牛が元気になると、子どもたちにも笑顔が戻った。その後、すでに予定していたお世話の日程が終了したにも関わらず「最後に丁寧なお世話をしてお別れしたい」という願いを共有し、「丁寧なお世話」とは具体的にどのようなことか話し合った。本気で考え話し合いが進んだために、意見がぶつかり泣き出してしまう子もいたが、上級生の2年生を中心に合意が進み、一致団結することができた。その後も「丁寧なお世話」が続いたが、最後は子どもたちから自発的に仔牛に近寄り「さようなら、ありがとう」と声をかけながら別れを惜しむ姿が見られた。

6 活動の成果

酪農業ではない家庭の子が、学習活動の半ばで「もっと上手にお世話できるようになりたいから、休みの日に行っても良いですか」と自ら石澤牧場にお問い合わせの姿があった。教員の知らない部分であり、後日驚かされた出来事だったが、牧場からは「いつでも来てね。一緒に頑張ろう!」という対応をしていただいた。牧場は忙しい中ではあるが、子どもの思いや願いを受け止めて行動してくださった。また、これまでお手伝いをしたことがなかった酪農業の家庭の子が、この活動の終了後も家の牛舎でお手伝いをするのが習慣となった。今では、父親と同じ仕事を当たり前のようにこなしており、母親は「もう小さな酪農家です。立派です。」と賞賛している。

この学習活動については、資質・能力の着実な定着はもちろんだが、学校と家庭、地域が一体となって子どもたちを支え、育てることの重要性について共有することができたことが何よりの成果である。



バター作り

お尻の毛が抜けおちた仔牛



獣医師による説明



家の牛舎で父親とお世話をしている様子